

ろうそくと貝がら

小川未明

青空文庫

海の近くに一軒の家がありました。家には母親と娘とがさびしく暮らしていました。けれど二人は働いて、どうにかその日を暮らしてゆくことができました。

父親は二年前に、海へ漁に出かけたきり帰ってきませんでした。その当座、たいへんに海が荒れて、難船が多かつたといえますから、きつと父親も、その中に入っているのだらうと悲しみ嘆きました。

けれど、また、遠いところへ風のために吹きつけられて、父

親やはまだ生き残のこっていて、いつか帰かえってくるのではないかというような気きもしまして、二人ふたりは、おりおり海うみの方ほうをながめて、あてなき思おもいにふけていました。

「お母つかさん、お父とつさんは死しんでしまわれたんでしようか。」と、
娘むすめは目めに涙なみだをためて、母親ははおやに問といますと、

「いまだにたよりがないと、きつとそうかもしれない。
い。」と、母親ははおやも、さびしそうな顔かおつきをして答こたえました。

「ほんとうに、お父とつさんが生いきていて帰かえってきてくだされたら、
どんなにうれしいかしれない。」と、娘むすめはいいました。

「生いきていなされば、きつと帰かえってきなさるから、そう心配しんぱいせ
ずに待まっていたほうがいい。」と、母親ははおやは娘むすめをなぐさめました。

むすめひるまじごと
娘は昼間仕事に出て、日が暮れかかると家に帰つてきました。

窓を開けると、かなたに青い海が見えました。静かに、海のかな

たが、赤く夕焼けがして暮れてゆくときもあります。また、灰

色に曇つたまま暮れてゆくときもあります。またあるときは、

風が吹いて、海の上があわだつて見えるときもあります。

月のいい晩には、往來する船も、なんとなく安全に思われ

ますが、海が怒つて、真つ暗な、波音のすさまじいときには、

どんなに航海をする船は難儀をしたかしれません。

そんなとき、娘はきつと父親のことを思い出すのでありまし

た。もし父親が、こんな嵐の強い晩に、海をこいで帰つてこら

れたなら、方角もわからないので、どんなにか難儀をなされる

だろうと、こう考かんがえると、娘むすめはもはや、じつとしてゐることができま
せんでした。立たち上あがつて、窓まどからいつしんに沖おきの方ほうを見みつ
めていました。

二

父ちち親おやの行方ゆくえがわからなくなつてから、二人ふたりは、毎まい晚ばん仏壇ぶつだん
に燈とも火しびをあけて拜おがみました。

「お母つかさん、外そとはたいへんな風かぜですね。お父とつさんが、今こん夜やあたり
帰かえつておいでなさるなら、沖おきは荒あれて真まつ暗くらでどんなにお困こまりで
しょうね。」と、娘むすめはいいました。

「そんなことはないよ。こんな晩ばんにどうしてお父さんとつが、あの船ふねで帰かえつておいでなさるものか。そんなことを考えかんがないほうがいいよ。」と、母親ははおやは答こたえました。

「だって、帰かえつておいでなさるかもしれないわ。わたしは、お父さんとつが見当けんとうのつくように、ろうそくの火ひを点ともしてあげるわ。」と、娘むすめはいつて、窓まどぎわに幾本いくほんとなく、ろうそくに火ひをつけてならべました。

なにしろ風かぜが強いつよので、ろうそくの火ひは幾いくたびとなく消けされました。けれど、娘むすめは消きえると、点つけ、消きえると点つけして、沖おきから、遠とおく陸りくに燈火ともしびが見みえるようにと、熱心ねっしんにろうそくの火ひを点とほしていたのであります。

娘は、ついに家にありつただけのろうそくを燃やしつくしてしまいました。もはや、このうえは、遠く離れた町にまで買ってこなければ、点けるろうそくはなかつたのであります。

「おまえの志は、よくお父さんにとどいたと思います。もうろうそくがなくなつたから、さあ休みましょう。」と、母親はいいました。

夜も、いつしか更けていました。娘もしかたがないと考えて、二人は戸を閉めて床に入ろうとしました。

そのとき、だれか戸をたたくようなけはいがしました。

「だれかきたようだ。」と、母親はいいました。

「ほんとうに、だれか戸をたたくようですね。いま時分だれだろ

う。きつと、お父さんが帰っていらつしたのですよ。」と、娘は
 勇んで、さつそく、戸口のところへ走つていきました。

「お父さんですか。」と、娘は叫びました。けれど、戸の外の人
 は返答をしませんでした。

「どなた。」といいながら、娘は戸を開けました。すると、黒い
 装束をした脊の高い、知らぬ男が突つ立っていました。娘は
 びつくりして、後ずさりをしました。黒い装束の男は、家の
 中へ入つてきました。

「あなたは、どこからおいでなされました。この真夜中に家ちがいじやありませんか。」と、母親ははおやは驚いた顔つきで、男おとこをながめながらいいました。

「いや、家ちいえがいじやありません。じつはお父さんからの言ことづてがあつたのでまいりました。」と、黒い装束くろい しょうぞくをした男は、穏おだやかに答こたえました。

「え、家のお父さんうち とつからですか？」と、娘むすめはびっくりして、男おとこのそばに駆かけ寄よりました。

「そうです。あなたのお父さんとつはいま、遠とおくにいられます。けれど、それはじつに暮くらしいところところです。あなたのお祖父さんじいも、いっしょに住すんでいられます。あなたが毎夜まいよ、思おもっていてくださ

ることは、よくお父さんとつにわかっていますので、どうか心配しんぱいせずことにいてくれるようにとのお言ことづてでございました。」と、その男おとこはいいました。

娘むすめと母ははおや親おとこは、なおいろいろと、その男おとこに父ちち親おやの身みの上うえを聞き

こうと思おもいましたか、

「今夜こんやは、もう遅おそいから、いずれまたお伺うかがいたします。」と、

男おとこはいつて、袋ふくろに包つつんだものを差さし出だして、

「これは、ほんの土産みやげです。私わたしが帰かえった後あとでござらんください。」

と、娘むすめにその袋ふくろを渡わたして、男おとこはこの家いえを出でて、どこへか闇やみの中なかに

消きえてしまいました。

男おとこが去さった後あとで、娘むすめは袋ふくろを開あけてみますと、その中なかには、無むすう数ずう

の金銀の粉が入っていて、目もくらむばかりでありました。二人は、いったいこれはなんだろうと不思議がりましたが、夜が明けたらよく見ようといつて、床に就きました。

明くる日、二人はその袋を開けて子細に見ますと、金でも銀でもなければ、よごれた貝がらでありました。

「あれはきつと、きつねかなにかの化け物だ。こんな貝がらなどを持って、おまえをだましにきたのだ。こんなものは捨てておしまい。」と、母親はいつて、袋の中の貝がらを、すっかり窓の外に投げ捨ててしまいました。娘は、二、三日たつて窓の外を見ますと、捨てた貝がらが、すっかり、美しいかわいらしい黄色な花になっていました。

その日ひから娘むすめは、
びました。

朝あさ晩ばん唄うたをうたいながら、
その花はなを摘つんで遊あそ

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「ろうそくと貝《かい》がら」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ろうそくと貝がら

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>